

「源義経 ～悲劇のアイドル」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 平氏を倒した天才的な軍人・源義経

源義経(みなもとのよしつね)という名前を聞いて、皆さんは何を思い浮かべますでしょうか。

義経は、平氏を滅ぼした実力者でありながら、悲劇的な最期を迎えた英雄として、数多くの小説や映画、あるいはTVドラマなどで紹介されるなど、我が国で五本の指に入るほど有名な歴史上の人物として知られており、また、彼の生き様ほど「ドラマチック」と呼ぶにふさわしいものはありません。

しかし、義経の実像については、案外ご存じない人が多いのではないのでしょうか。今回の講座では、義経の生涯をたどることで、当時の歴史の大きな流れと、彼が背負った「運命」について詳しく探っていきたいと思います。

義経は、1159年に源義朝(みなもとのよしとも)の九男として生まれました。彼が後に「九郎(くろう)義経」と呼ばれたのはこのためですが、彼が生まれた年は、我が国の歴史が大きく動いた時期でした。院政を開始された後白河(ごしらかわ)上皇の近臣であった、信西(しんぜい)と藤原信頼(ふじわらののぶより)との対立が激しくなったことをきっかけに、平治(へいじ)の乱が起きたのです。

この戦いの勝者となった平清盛(たいらのきよもり)は、政治上での発言力をますます高め、やがては平氏で朝廷内の要職を独占するという形式で政治の実権を握りました。いわゆる「平氏政権」の誕生です。

一方、義経の父であった義朝は戦いに敗れ、敗走の途中で家臣の裏切りにあって無念の最期を遂げると、当時赤ん坊であった義経も、母とともに平氏の軍勢に捕らえられ、清盛の前に引き出されました。

ここで殺されてもおかしくはなかったのですが、絶世の美女であった義経の母が、清盛の愛人となることで義経は助命されたと伝えられています。このとき、清盛の継母(まはは)の「死んだ息子に似ているから」との懇願(こんがん)で、同じく殺されずに済んだ若者がいました。

助命された若者こそが、義経の兄である源頼朝(みなもとのよりとも)でした。頼朝・義経兄弟を結果的に生かしてしまった清盛の判断が、その後の平氏の運命を大きく狂わせていくのです。

さて、義経は母の元で数年過ごした後に、僧になるため京都の鞍馬寺(くらまでら)に入れられましたが、やがて父の復讐を果たすために脱出し、諸国を転々とした後に、奥州の藤原秀衡(ふじわらのひでひら)を頼りました。

秀衡は、平泉(ひらいずみ、現在の岩手県)を中心として、平安末期に栄華を誇った奥州藤原氏の三代目でした。義経が 22 歳のとき、兄の頼朝が挙兵したと聞くと、義経は自分の家臣を引き連れて頼朝に面会し、以後は頼朝の指揮下に入りました。

ところで、義経の家臣のなかで一番名前が知られているのは、何といたっても武蔵坊弁慶(むさしぼうべんけい)でしょう。弁慶は実在の人物ですが、義経が牛若丸(うしわかまる)と呼ばれた少年の頃に、京都の五条大橋で弁慶と対決した物語はあまりにも有名ですね。

しかし、この話はあくまで伝説であり、鞍馬寺を抜け出してから、秀衡の保護を受けるまでの数年間の義経の行動は、未だに謎に包まれたままです。

ただ、間違いなく断言できることは、義経が頼朝に会うまでのあいだに、類(たぐい)まれな「戦術(=戦いに勝つための具体的な方法のこと)」を身に付けていた、ということです。

なぜそうなのかというと、時間をかけて培(つちか)われた彼の才能が、この後の平氏との戦いの中で、遺憾(いかん)なく発揮されていくからです。

さて、清盛が 1167 年に太政大臣(たじょうだいじん)にまで昇進したり、自分の娘を高倉(たかくら)天皇に嫁がせ、生まれた男子を 1180 年に安徳(あんたく)天皇として即位させたりするなどして、平氏政権は栄華を極めました。

しかし、摂関家と同じ手法で政権を確立したことが、武士や貴族の双方から反感を買ったことや、西日本を中心に大飢饉が起きたり、あるいは清盛自身が 1181 年に死亡したりするなどして、平氏政権は次第に衰えていきました。

平氏に対する反感は、やがて源頼朝らの挙兵をもたらし、1183 年に源義仲(みなもとのよしなか)が倶利伽羅峠(くりからとうげ)の戦いで平氏の軍勢を破ると、身の危険を感じた平氏は、安徳天皇とともに都落ちをしてしまいました。

しかし、備中(びっちゅう、現在の岡山県西部)の水島(みずしま)では義仲相手に大勝するなど、本拠地である西国では、平氏はまだまだ力を持っており、都での復権を虎視眈々(こしたんたん)と狙っていました。

また、瀬戸内海がある西国では海戦が多く、東国の山育ちの人間が多い源氏に対し、強力な水軍を持っている平氏の優位は動きませんでした。このようなことから、平氏と源氏との戦いは、当分のあいだ一進一退を繰り返すであろうと思われていました。

ところが、結果として平氏は、都落ちからわずか 2 年足らずで滅亡しているのです。どうしてこの

ようなことになったのでしょうか。

そのカギを握る人物こそが、源義経だったのです。

都落ちした平氏を追討することを決意した頼朝でしたが、どちらかといえば政治家向きだった彼は、鎌倉で内政に専念し、代わりに弟である源範頼(みなもとののりより)や義経に戦わせましたが、いつしか義経が戦いの指揮をとるようになりました。

1184年3月、一ノ谷(いちのたに、現在の神戸市)に陣を敷き、山を背後に軍勢を構えた平氏は、正面から攻めてくるであろう源氏を迎え撃つべく待っていたのですが、義経は山の頂上から、急斜面のため常識では通れそうもない坂を馬ごと一気に下り、平氏の背後を奇襲しました。

不意をつかれた平氏は大混乱となり、一ノ谷を放棄して西へ敗走せざるを得ませんでした。義経の思わぬ奇襲によって、源氏が勝利を得たこの戦闘は「一ノ谷の戦い」と呼ばれ、また義経が急坂を一気に下った戦いぶりは、後の世に「鶉越(ひよどりごえ)の逆(さか)落とし」と称えられました。

義経には常識にとらわれない思考能力と、一瞬のスピードで決着をつけようとする天才的な「戦術」に関する能力がありました。義経という戦争の天才を得た源氏と、人材不足に悩む平氏との大きな差が、それぞれの今後を象徴していました。

一ノ谷を放棄した平氏は、屋島(やしま、現在の香川県高松市)に本拠をかまえて四国を確保しようとしていました。屋島の北側には瀬戸内の海が広がっており、平氏は源氏が当然海を渡ってやって来るであろうと思い、待ち伏せして全滅させようと考えていたのです。

ところが、ここでも義経が自慢のスピードで奇襲をかけてきました。1185年2月、義経は嵐の中を、少数精鋭の騎馬武者とともに、荒海を馬ごと船出しました。通常なら難破してもおかしくないのですが、歴史の神様を味方につけた義経は、嵐を追い風に、極めて短時間で上陸を果たすことができました。

上陸した義経軍は、海岸伝いに浅瀬を馬で渡って屋島の背後に回り、安徳天皇がおられた御所を急襲しました。またしても義経に不意をつかれた平氏は、天皇を死守するためにも逃げる以外に選択肢がなく、屋島も放棄せざるを得なかったのです。なお、この戦闘は「屋島の戦い」と呼ばれています。

ちなみに、源氏の武者である那須与一(なすのよいち)が、平氏が所有する船に立てられた、日の丸が描かれた扇の要(かなめ)を見事に射抜いたという、平家物語の有名なエピソードはこの際のもので、この出来事こそが、後の平氏の運命を物語っていたように思われてなりません。

屋島を放棄した平氏は、それ以前に山陽道や九州の大宰府(ださいふ)も源氏に抑えられていたことによって、本州と九州とを結ぶ関門海峡沿いの壇ノ浦(だんのうら、現在の山口県下関市)に追いつめられてしまいましたが、壇ノ浦での戦いは完全な海戦となるため、経験豊富な平氏にはまだ希望が残ってい

ました。

それに比べ、本格的な海戦の経験のない源氏の不利は大きく、さすがの義経も苦戦するかと思われたのですが、いざフタを開けてみれば、義経の完勝で終わりました。1185年3月に行われたこの戦闘は「壇ノ浦の戦い」と呼ばれていますが、なぜ義経は未経験の海戦で勝つことができたのでしょうか。

実は、義経は平氏の軍船の操縦者をことごとく射殺することにより、敵の船を動けなくしてしまったのです。船の操縦者は殺してはいけない、というより、そもそも戦いに参加していないというそれまでの常識を打ち破る、まさに「コロンブスの卵」的な義経の柔軟な発想でした。

船が動かなくては勝てるはずがありません。平氏側の武将も奮戦して一時は義経を追いつめ、この際に義経が八艘(はっそう)飛びで難を逃れるという場面もありましたが、最終的には敗北し、あれほどの栄華を誇った平氏が最期の時を迎えてしまいました。

かくして、義経は平氏との一連の戦いで会心の大勝利を収めたのですが、皮肉なことに、このときすでに義経には破滅の兆(きざ)しが見えていました。平氏を滅亡させたことは、確かに「戦術」としては申し分なかったのですが、彼の兄である頼朝は、義経の「ある行為」に激怒していたのです。

2. 「戦略」が理解できなかった「戦術」の天才

平氏を滅亡させることができたのは、確かに義経の類(たぐい)まれな戦術によるものであり、その功績は大きいものがありました。しかし、頼朝は平氏滅亡を喜ぶどころか、義経による「信じがたい失策」に対して激怒しました。なぜならば、義経が天皇であることを証明する大事な「三種の神器(じんぎ)」のすべてを取り戻すことができなかつたからです。

頼朝個人としては、父の源義朝の仇(かたき)である平氏が滅亡して嬉しくないはずがありません。しかし、彼は自分の利害よりも、武士全体の利益を優先し、そのための「戦略(=戦争に勝つための総合的あるいは長期的な計略のこと)」を考える政治家でもありました。

関東で力をつけて、平氏を滅亡寸前にまで追い込んだ頼朝でしたが、それはあくまで軍事力のみのものであり、武士に土地の個人所有を認めさせるといった「武士のための政治」を行うには力不足でした。そこで頼朝は、当時は形式化してはいたものの、荘園などを監視する立場である朝廷との交渉によって「武士のための政治」を実現させようとしていました。その切り札になるのが三種の神器だったのです。

実は、平氏が安徳天皇を引き連れて都落ちした際に、三種の神器も一緒に持ち去られてしまいました。このため、後白河法皇(ほうおう、出家した上皇のこと)は、やむなくご自身の「治天(ちてん)の君(きみ)」としての権威で、後鳥羽(ごとば)天皇を神器なしで強引に即位させていました。

この点に目をつけた頼朝は、三種の神器を自らの手で取り返し、後白河法皇に引き取らせることに

よって、自身がめざした「武士のための政治の実現」に大きく前進しようと考え、義経に対して「平氏滅亡よりも三種の神器の奪回を優先させて、どんなことがあっても取り戻してこい」と厳命(げんめい)した可能性が高いのです。

ところが、軍事的センスは高いものの、頼朝の政治的センスが全く理解できなかった義経が平氏滅亡に気をとられているうちに、清盛の未亡人が、安徳天皇とともに三種の神器を抱えて海の中へ飛び込んでしまいました。

神器のうち、勾玉(まがたま)と鏡は取り戻せましたが、草薙(くさなぎ)の剣は海の底に沈んでしまって、ついに取り戻せなかったのです。これでは、神器を切り札として後白河法皇に武士の要求を認めさせるどころか、失態を問われることで、かえって頼朝の地位が危うくなる可能性すらありました。

軍事の天才である義経であれば、三種の神器を取り戻してくれると期待していただけに、頼朝は義経に対して激怒したわけですが、義経自身は、平氏を滅亡させたことの方がよほど重要であると信じ込んでおり、頼朝がなぜ自分に激怒するのか分からないままでした。

これに加えて、義経はさらに致命的なミスを犯していました。頼朝の許可もなく、後白河法皇からの検非違使(けびいし、主として京都の治安維持を担当する役職のこと)への任官を勝手に受けてしまったのです。なお、任官後の義経は「九郎判官(くろうぼうがん)」と呼ばれましたが、これが後に「判官鼻眞(ぼうがんびいき)」という言葉を生むこととなります。

この義経の「朝廷からの任官を受ける」という行為は、実は頼朝のそれまでの血のにじむような努力を全部無駄にしてしまいかねない、とんでもないことでした。なぜそう言い切れるのでしょうか。

頼朝が目指す「武士のための政治」というのは、朝廷から独立した軍事政権を確立するということを意味していました。もし政権の独立性を維持しようとするれば、当然部下への人事権も、頼朝側で独自のものを持たなければなりません。

一方、官位というものは朝廷から授かるものですから、それを頼朝の承認もなく受け取るということは、頼朝の権威をまるつぶれにしてしまいかねない「愚かな行為」なのです。それなのに、よりによって頼朝の実の弟である義経が、あっさりと朝廷から勝手に官位を受けてしまったのですから、頼朝にとってはたまったものではありません。

現実に、この後多くの頼朝の家臣が「弟の義経様が受け取るのであれば」といわんばかりに、朝廷から次々と任官を受けてしまいました。これらに対する頼朝の嘆きや怒りは凄まじいものであったと伝えられています。しかし、義経自身は、三種の神器と同様に、自分が犯した大きなミスに全く気がついていませんでした。後に頼朝に送った手紙において「自分が朝廷の任官を受けることは、源氏一族にとって名誉なことではないですか」と書いているくらいです。

「政治家」の頼朝と「軍人」の義経とでは、考えがまるで異なるのはむしろ当然とも言えました。この二人の間を取り持つ優秀な人材がいなかったことが、お互いの意思の疎通(そつう)を欠かせて、

ついには兄弟で対立するという結果を生んでしまったのです。

義経は、生け捕りにした平氏の残党を引き連れて京都へ凱旋(がいせん)しました。憎しみの対象になっていた、平氏の没落の様子を間近に見た民衆から喝采(かっさい)を浴びた義経でしたが、怒りが収まらない頼朝からは「二度と鎌倉には入るな」と一方的に突き放されてしまいました。

そればかりでなく、頼朝によって自分の領地をすべて取り上げられ、暗殺までされかけた義経は、ついに頼朝との全面对決を決意しました。義経は後白河法皇から「頼朝追討」の院宣(いんせん、上皇＝法皇からの命令書のこと)を強引にもらおうと、九州で再起を図ろうと考え、精鋭とともに船出をしましたが、不運にも嵐にあって難破してしまいました。

かつての屋島の戦いにおいて、嵐の中を短時間で四国に上陸を果たしたときと比べ、何という違いでしょうか。これ以降、それまでの幸運から見放された義経には、苦難の道が続くことになるのです。

精鋭の大半を失った義経は、わずかの手勢を率いて、かつて自分をかくまってくれた奥州の藤原秀衡を頼って落ちのびました。なお、この逃亡の際において、北陸の安宅(あたか)の関における「勸進帳(かんじんちょう)」の伝説が残されており、現代でも歌舞伎などを通じて有名になっています。

一方、義経が没落していったのと対照的に、後白河法皇の「大きなミス」につけ込むことで、頼朝の悲願であった「武士のための政治」を達成できる「大きなチャンス」がめぐってきました。

いくら義経に強制されたとはいえ、後白河法皇が「頼朝追討」の院宣を出されたことは「痛恨の失敗」でした。なぜなら、それまで平氏滅亡のために戦ってくれた頼朝を裏切ることになるからです。しかも、朝廷は自前の軍隊を持っていませんから、反発した頼朝に攻められてはひとたまりもありません。

義経が去った後の1185年11月、頼朝は妻の父である北条時政(ほうじょうときまさ)を筆頭とする大軍を京都へ送り、後白河法皇に迫りました。

「法皇様の命令によって平氏滅亡に尽力したこの頼朝を、こともあろうに討てとはどういうおつもりですか？」

後白河法皇をはじめとする朝廷は恐怖に震え上がり、頼朝側をなだめるために、やむなく二つの権利を認めました。後世に名高い「守護・地頭の設置」です。

このうち守護は、設置当時は追捕使(ついぶし)といいました。後白河法皇に「義経追討」の院宣を出させることに成功した頼朝が、行方の分からない義経を捕まえるため、という名目で全国に追捕使を置くことによって、軍事・警察権を事実上握ることになりました。

また、地頭は公的に認められた土地の管理人ですが、その任命権が守護を含めて頼朝側にあるため

に、武士が初めて自分の土地を公的に所有できる道を開くことになりました。

さて、その後の義経一行ですが、何とか藤原秀衡のところまでたどり着くことができました。秀衡は義経の戦術の巧みさを、来るべき頼朝との戦いの切り札にしようと考え、義経を手厚く保護しましたが、一年も経たないうちに秀衡が病死してしまいました。これも義経にとっては大きな不運だったのです。

秀衡の後を継いだ藤原泰衡(ふじわらのやすひら)は、父ほどの器量を持っておらず、頼朝からの「義経を殺せば藤原氏の安泰は保証する」という誘いに乗ってしまい、1189年に義経の住んでいた館を急襲しました。義経主従は奮戦しましたが、多勢に無勢ではどうしようもなく、ついに義経は妻子とともに自害して果てました。わずか31歳の若さでした。

なお、義経の最期の際に弁慶が彼をかばい、屋外で体中に矢を浴びて、立ったまま死んだとされる「立往生(たちおうじょう)」の話が伝説として残されています。また、義経を自ら殺したことによって、切り札を失った泰衡は、結局この後に頼朝によって倒され、約100年続いた奥州藤原氏は滅亡してしまいました。

源義経という存在は、いふなれば「歴史の神」が「平氏を倒すため」、ただそれだけのためにこの世に遣(つか)わした「英雄」でした。だからこそ、平氏が滅亡した後に役割を終えた彼は、それまでの幸運から一気に奈落の底に突き落とされる不運を味わい、この世から「退場」させられたようにも見えます。

そんな彼のドラマチックな人生は、一般民衆の心にも深く刻まれ、敗者や弱者をいたわる「判官贔屓」という特別な感情をもたらしました。

また、彼をこのまま死なせるのは余りにもかわいそうであるし、この世に恨みを残して死んだら怨霊(おんりょう)としてたたるかもしれない、という思いが、様々な「義経不死伝説」を生み出しました。なかには、義経が海を渡ってジンギスカン(チンギス=ハーン)となり、モンゴルを統一したという話まであるほどです。

いずれにせよ、名高い歴史作家である司馬遼太郎(しばりょうたろう)氏の言葉を借りれば、義経は「我が国史上初めての人気者」、すなわち「アイドル」となったのです。

「悲劇のアイドル」である義経は、これからも我々日本人の心の中で永遠に生き続けることでしょう。

ところで、平氏が安徳天皇を引き連れて都落ちをした後に、後白河法皇が後鳥羽天皇を神器なしで即位させた話については先述しましたが、平氏が滅亡して安徳天皇が入水(じゅすい)されるまでの2年足らずの間は、実は我が国にお二人の天皇がご存在されておられたこととなります。

つまり、鎌倉末期から室町前期における「南北朝時代」と同じ状態になっていたのです。今回の場

合は期間が短かったので目立たないのですが、もし平氏があっけなく滅びることなく、安徳天皇が長生きされておられれば、南北朝時代と同じように、混乱の時期が長続きしたかもしれません。

その場合は、京都と中国地方にそれぞれ天皇がおられるのですから、南北朝ならぬ「東西朝時代」と呼ばれたかもしれませんね。いずれにせよ、そんな不安定な時代になりそうなのを一掃した源義経の存在は、まさに「歴史を変えた英雄」と呼ばれるにふさわしいといえるのではないのでしょうか。

(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 5 中世動乱編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379416>

YouTube 再生リスト「源義経」
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4ebgt8fdp2f7WN-SQ9dvvu>

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>